

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	言語と文学
Author(s)	手島, 稔之
Citation	広大言語 , 5 : 30 - 32
Issue Date	1965-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046223">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046223</a>
Right	
Relation	



Clause において我々がたびたび注意しなければならないことは、主要概念が必ずしも「主節」に表現されるものではなく「従属節」にも表現されるということである。例えば；

This was because he was ill. また、It is true that he is very learned. の「主節」において表現されている概念は、Certainly he is very learned. (たしかに、彼は学識が深い) のように単純な副詞で言いなおすことができる。

これだけではまだ不十分ですが、Three Ranks. の中に於ける問題点、疑問点を断片的に述べてみました。

## 「言語と文学」

手 島 稔 之

人間とは何か。人間はいかに生きるべきか。我々は常にそれを考え、いつも答えを求めている。文学とはそういう問に対するひとつの解答である。しかし我々は文学に接する機会を持っていても、真に満足することなく了ることが多い。問題のありかは明らかにされることもあるだろうが、かえって迷路に導き入れるものさえなくはない。解決されることもあろう。しかしさらに問題の再提起を我々に向かつて突きつけるものもある。文学作品とは、いつも問題と解答と多くの混沌とを含み持ち、その憂鬱な眼で我々を正面から凝視してくるものなのだ。救われたい我々読者は文学作品の中を、オアシスを求めて沙漠を徘徊する旅人として歩き回る。文学作品はひとつの或る生物体のように有限なオルガニズムの形態を持つている。それは我々と何らの関係もないものさえ含んでいる。実は、我々はそのオルガニズム全体を理解し尽さねばならない義務はないのである。或る一個の文学作品は、我々にとって、いわば赤の他人であり、見知らぬ人でしかない。我々は、初めて文学作品に純真無垢な一読者として接するということは、初対面の人に出会うのと同じである。唯彼の語ることを聞き、彼の音調を味わい、彼の例証するところを認識するということだけではなく、既に我々は問題意識を持った心で、しかもすなおに耳を、心を傾けて彼の饒舌を辛抱強く吟味するの

だ。

文学の生命は表現である。《文学とは表現である》といつても過言ではないだろう。表現ひとつで、哄笑も感涙も思いのままだ。どんなに偉大な思想も表現されないでは無意味である。表現されてはじめて真理も色づき呼吸する。文学という殿堂はまさに表現という要石（かなめいし）によつて支えられているのだ。我々が詩人の魂に resort することが出来るのも、表現を通してである。

言語は表現である。しかし《言語そのもの equal 文学》ではない。言語は或る意図をもつて使用されてはじめてその総体が文学となる。言語は文学作品というオルガニズムの、いわば構成分子としての役割を果すものである。「言語は、大理石、青銅、粘土などが彫刻家の材料であるように文学の媒材である。」（E. サピア）

作家・詩人が表現という作業を行うときに、この言語材料をいかに取り扱うかという点でひとつの障壁に突きあたらねばならない。また、表現された作品を、我々が理解、鑑賞するという作業を行うときに、言語はやはり、そのための手段でありながら同時にひとつの障壁となつていることは否定できない。これを表現における言語の「二重の障壁」と呼ぶことができる。この「二重の障壁」は、障害という観点からみれば、必要悪的存在であり、言語と表現に関する本質的事象である。

優れた表現も、それが理解されないでは真価を失う恐れがある。理解度に対するさらに大きな抵抗は言語の時間的変遷、地理的差異、その他の用法、語の差異が挙げられる。多くの文学作品には、より共通語的な言語で表現されてきているが、例えば現代語の感覚で源氏物語を理解することはむしろ容易でない。その理由は、単に歴史的社会的条件が、10世紀頃の中世貴族社会と20世紀中葉の現代市民社会とでは異なつているということだけでなく、言語そのものに焦点を絞れば、特に語と用法の変化が著しいからであろう。また、我々は現代国語を理解する程度において、他のあらゆる言語を理解することは不可能に近い。また方言差の大きな言語社会では異なる言語を自己の属する方言域の言語と同等に理解することは困難である。母国語と外国語の関係から翻訳の可能性ということも問題になるであろう。たとえば *Canterbury Tales* を読むのに解説書を読みながら Chaucer の言葉で理解していく正攻法は、味わい深いかもしれないが、翻訳を読む方が手つとりばやく、自然な読み方であるともいえる。

多くの閉鎖的な小さな社会集団の奇妙な連鎖の総合である社会での自己満足の用語の無限の膨大さを我々は嘆く。文学作品の中ではこれらの特殊用語的語や用法は、注意深く、効果的に使用されているようである。

人はそれぞれ理解度と興味の対象の相違によつて文学作品を選択する。文学作品の選択の仕方、言い換えれば、文学に接する態度と言えるかもしれないが、その型の要素に3種類ある。その1は娯楽

派である。大衆娯楽小説的作品を読んで充分楽しむ傾向のある人々。その2は現外派である。作家が現代人であり読者と共通の地盤に立ち、悩み、考え、且つ発言し、読者と共に生きる作家の作品を愛読する人々。その3は古典派である。長い時代の流れ、社会の変遷に耐え、その真価を猶現代にまで保持してきた古き善きもの、それが古典である。古典は真理を語つてくれ太古からの人間の豊かな思想性と情緒性を賞味させてくれるのである。そういう考えからいわゆる古典的作品を好んで読む傾向の人々。私はもともと古典派であるし、今後も古典派的性格を堅持するであろう。しかし現在、現代派に大きな関心をよせている。なぜならば古典はなるほど無限の宝庫的性格を持つているが、共通の「現代」という時代を彼ら古典作家は我々と共に生きることが不可能であつた。現代派にもてはやされる作品の魅力は実に「同時代性」（そこからくる共感）にある。そしてここでは言語の *Ausdruck* , *Darstellung* , *Appell* の3つの作用が明確に合致するという実感      まさに表現の有効性が最大限生きるという可能性      があるからである。

(昭和40年10月20日)

## Attributivus と冠詞の関係に就て

竹 島 俊 之

聖書を読んでいると、しばしば次のような表現に出会う。e. g. *ho huios tu anthropou* (人の子), *ta krina tu agrou* (野の百合), *to halas tes ges* (地の塩), *he basileia ton ouranon* (天国) etc. それと全く対照的に両方の名詞に冠詞の付かない表現も又頻繁に用いられる。e. g. *aggelos kuriou* (主の御使い), *basilisa notou* (南の女王), *bathos ges* (地の深み) etc. その他の型としては属格の名詞は無冠詞であるが、修飾される名詞が冠詞を取る場合。e. g. *idou he doule kuriou* LK. 1-38。或は属格名詞のみが冠詞を取る場合、*pater, kurie tou ouranoukai tes ges* LK 10-21 (天地の主なる父よ), *en hemerai tou*